

[平成21年度普及に移す技術]

[技術名] イクヒカリ移植栽培の高位安定生産技術

[要約] イクヒカリの5月初旬植えでは、基肥N量5kg、栽植密度70株/坪により目標穂数350~400本、総籾数3万粒/m<sup>2</sup>を栽培の目安とする。5月下旬に同条件で移植すると穂数400本/m<sup>2</sup>で5月初旬植え以上の収量が得られる。

[キーワード] イクヒカリ、収量構成要素、基肥量、栽植密度

[担当] 福井農試・作物・育種部・作物研究グループ

[連絡先] 電話 0776-54-5100 電子メール hiroyasu\_tokudo@fklab.fukui.fukui.jp

[背景・ねらい]

平成16年から奨励品種となった「イクヒカリ」の高品質・安定多収栽培技術確立のため、その指標となる収量構成要素を明らかにする。

[技術の内容・特徴]

- 1 イクヒカリ5月初旬植えの収量構成要素の目標は、穂数350~400本/m<sup>2</sup>、総籾数3万粒/m<sup>2</sup>、登熟歩合90%、千粒重24gで精玄米収量650kg/10aである(図1)。
- 2 地力が比較的高い圃場での5月初旬植えの基肥N量は全層施肥で5kg/10a、栽植密度は70株/坪とする。食味(玄米蛋白含量)を低下させないため、穂肥N量は4kg/10a(2kg×2回)とする(表2)。
- 3 収量を高めるためには1回目の穂肥量を多くして葉色を濃くさせ総籾数を確保するとよい(表1)。また、登熟後半の葉色が低下すると乳白米が増加するので、地力が低く登熟後半の葉色が低下しやすい圃場では穂肥2回目の配分を増やした(1kg+3kg)穂肥とする。
- 4 5月下旬植えでも基肥N量5kg/10a、栽植密度70株/坪、穂肥N施用量4kgとする。穂数400本/m<sup>2</sup>程度の確保で5月初旬植えと同等以上の収量が得られる。密植は穂数や籾数の過剰により白未熟粒の増加の恐れがある。また、穂肥の増量は玄米蛋白含量を高める。(表2、図2)

[技術の活用面・留意点]

- 1 基肥全層施肥による試験結果なので、側条施肥の場合は基肥N量を4kg/10aとする。
- 2 移植時期に関わらず、地力が低い圃場では、ゼオライトや堆肥の施用、深耕などの土作りを実施した上で基肥N量5kg/10aとする。それでも茎数が少ない場合は穂肥1回目をN成分1kg/10a程度増施する。地力窒素の発現が期待できる5月下旬植えを行うのもよい。

[普及計画]

普及目標: 970ha (H25)

普及対象: イクヒカリ栽培農家

普及に向けた対応: 技術講習会での発表、技術資料への掲載

[具体的データ]

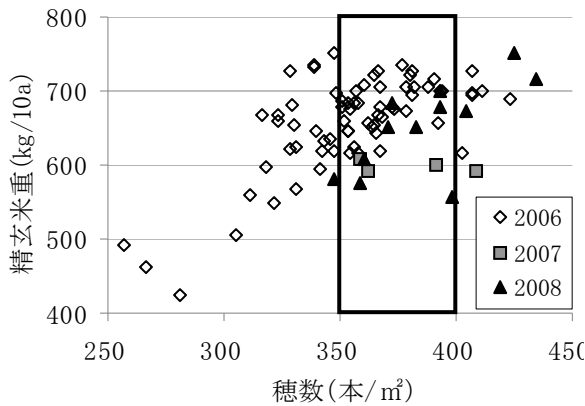


図1 5月初旬植えの穂数と精玄米重

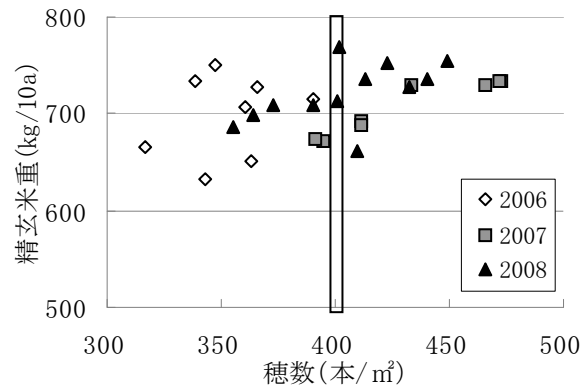


図2 5月下旬植えの穂数と精玄米重

表1 穂肥施用パターンと収量・品質(2008)

穂肥パターン	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	一穂粒数 (粒)	粒数 (百粒/m <sup>2</sup> )	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	乳白・基部・腹白粒率(%)	胴割粒率 (%)	玄米蛋白含量(%)
3+1	687	399	76.0	303	93.9	24.1	6.9	1.6	6.4
1+3	567	378	66.1	249	93.7	24.3	5.1	1.9	6.7
1.5+1.5+1	595	354	73.3	259	95.2	24.5	6.2	2.2	6.8

\*穂肥の施肥時期は、2回穂肥の場合は幼穂形成期とその10日後、3回めは20日後

\*品質は静岡精機 ES-1000、玄米蛋白含量はGS-2000で測定

表2 5月下旬移植栽培における栽植密度と穂肥が収量・品質に及ぼす影響 (2006~2008)

移植時期	栽植株数	穂肥N量	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	粒数 (百粒/m <sup>2</sup> )	千粒重 (g)	乳白・基部・腹白粒率(%)	胴割粒率 (%)	玄米蛋白含量(%)
5月初旬	70	4	616	373	275	23.9	5.9	3.0	6.6
		6	655	390	293	24.0	5.5	3.4	6.8
		4	697	373	293	24.9	2.4	11.0	6.1
5月下旬	50	6	703	368	300	25.0	2.0	11.9	6.2
		4	696	394	312	23.8	4.7	10.1	6.1
	70	6	724	399	327	23.8	4.2	10.0	6.3
		4	708	421	320	23.9	4.3	9.7	6.2
		6	731	434	332	24.0	4.2	10.1	6.5

\*50株/坪は2008年のみ。品質は静岡精機 ES-1000、玄米蛋白含量はGS-2000で測定

\*2006~08年は平年と異なり5月下旬植えの登熟前期(出穂後10日間)の平均気温の方が5月初旬植えよりも高くなったため胴割粒率が高まったものと考えられる。

[その他]

研究課題名：イクヒカリの高位安定生産技術

研究期間：2006~2008年度

研究担当者：作物・育種部 作物研究グループ 徳堂裕康、土田政憲